

## 中国人コンプラドールの「アセン」を追って ——横浜開港最初期の茶貿易との関わり——

【サマリー】

櫻井 良樹

幕末の開港後、欧米諸国との貿易が開始された際に、日本人商人と欧米人商人との取り引きにあたって、その交渉に中国人仲買人(コンプラドール=買弁)が大きな役割を果たしたことが知られている。開港当時、欧米人と日本人が直接やりとりするには、言語上や商売習慣上の違いによる難しさがあった。しかし中国人は、漢字・漢文を通じて日本人と意思を通ずることができ、さらに日本に先だって自由貿易が開始されていたことにより貿易慣習にも通じていた。本稿では、筆者が最近調査した茨城県猿島郡(当時は下総関宿藩領)の商人・茶業者である中山元成の輸出記録から、横浜開港最初期における中国人たちの茶貿易に果たした姿を垣間見た。中山は、1859(安政6)年の横浜開港直後、ウォルシュ商会(支配人ジョージ・ロジャーズ・ホール)に、阿星(実名は季星か)という中国人コンプラドールを通じて、鳳凰山という銘柄の茶を103壺売り込んだのが、横浜における外国商人への日本茶販売の最初であったという回想を残している。中山のところに残された取り引き記録には、他にも多くの中国人コンプラドールの名が、その所属する外国人商社の名や、取り引き条件(数量・値段)とともに記されている。いっぽう今回調査した外国人商人側の史料にも、人物を特定できるわけではないが、日本人商人との仲立ちをする中国人コンプラドールの姿を見ることができる。たとえばホールは、「自分の右腕で、ずっと自分より語学に堪能だ」と書いていたりするし、ウォルシュ商会のライバルであったハード商会の横浜駐在員も、「ドクター・ホールが雇っている中国人スタッフは、手に入るだけの良質の茶を買い集めている」と書いたりしている。これらの記事からは、茶貿易の世界において中国人たちが、単なる意志疎通者としての役割だけではなく、茶に対する深い知識を活用して外国商館で重要な役割を果たしていたことがわかる。